

11月8日、米の試食。炊きたてのご飯は瞬く間になくなった。福島県伊達市



一粒一粒 一歩一歩

福島・飯舘村から

Scene
2014

東日本大震災の福島第一原発事故による放射能汚染の影響で、全村避難が続く福島県飯舘村。村民と研究者らのボランティアが独自に除染して2012年から米作りを続けてきた。この秋収穫した米は公的機関の放射能検査を経て、初めて試食することができた。

11月8日夜、同県伊達市の宿泊施設に、認定NPO法人「ふくしま再生の会」(田尾陽一理事長)のメンバーら15人が集まった。15合の米が炊きあがると歓声が上がり、3年越しの試食にお代わりが相次いだ。

同村佐須地区で稲作や酪農をしていた菅野宗夫さん(63)は震災直後、東京在住の田尾さんらと出会い、「村を孫の世代に引き継ぎたい」と活動を始めた。田んぼは除染のため、表土を5センチほど削る。削った土は、田んぼの一角に深さ約1・5メートルの穴を掘って埋め、掘り出した汚染されていない土を上からかぶせる。田んぼの土や収穫した米などは、東京大学農学部の協力を得て放射能値を継続して測っている。

相次いだ。

同村佐須地区で稲作や酪農を



6月1日、今年も田植えにボランティアが集まった。福島県飯舘村



10月5日、手刈りした稲を運ぶ菅野宗夫さん。「いろいろな挑戦をしたという意味で、いい実りです」福島県飯舘村



11月4日、放射能値の測定前にボランティアがゴミを手作業でより分けた。東京大学

デジタル版に動画